

おおもとおおえまる 大伴大江丸と齋藤秋圃

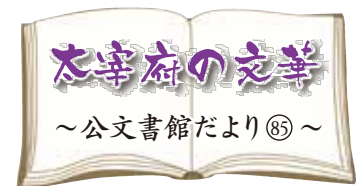
大伴大江丸（1722～1805）は、本名は安井政胤、大坂で生まれ、江戸中期に主に大坂で活躍した俳人です。大江丸は飛脚問屋として三都随一と呼ばれるほどに家業を盛り立て、同時に俳人としては、江戸の大島蓼太（りょうた）入門して与謝蕪村（よせうそん）などとも交わり、蕉風（きょうふう）松尾芭蕉（まつおのば）とその門人らが確立した俳諧の作風）の復興運動にも寄与しました。

秋月藩御用絵師で、のちに大宰府に隠居して町絵師となった齋藤秋圃（1772～1859）には、俳諧の発句を列挙して絵を添える、絵俳書や俳諧刷物の作品の存在が知られます。初期代表作の風俗絵本『葵氏艶譜』（享和3・1803年刊）にも発句を掲げたページがあり、秋圃は「足齋（あしざい）の名義で自作の句を1句載せています。実はこの中に大江丸も1句寄せており、両者の間には交流があったと思われまます。

秋圃は若いころは亦助（またけ）と名乗り、大坂で幫間（はうかん）（たいこもち。座興などをして酒席を盛り上げる人）をしながら、絵の巧みな人物であったことを、かの有名な滝沢馬琴（たきざわば）が自身の紀行文に記しています（『羈旅漫録』（享和3年刊））。両者は50歳の年齢の開きがあるものの、大江丸の最晩

年、大坂を舞台に俳諧や絵を通じて交流をもっていたと考えてよいでしょう。

齋藤家資料には大江丸に関する資料が2点遺されています。1つは『狂歌画巻』という狂歌・発句に秋圃が絵を添えたもので、その中に、大江丸の句「弁慶もたった1度よおほろ月（朧月）」が採録されています。



もう1つは、大江丸の自筆と思われる書状です。この書状には宛名がありませんが、齋藤家資料に含まれていること、両者が交流を持っていたことから、秋圃宛のものと考えてまず間違いありません。また「大江丸」の署名は、他に多数遺っている彼の作品に記された署名と比較して、同筆であろうと判断できます。

この書状は非常に難読で、解釈が困難なのですが、絵のやり取りおよびその代金について記されたもののようです。「秋圃と拝山―大宰府に偉才あり―展（6月5日（土）～7月18日（日））大宰府市文化ふれあい館・無料・月曜休館）で展示される予定なので、この機会にぜひご覧ください。

元大宰府市公文書館 朱雀 信城